大日堂のくも

むかしむかしの話。

小泉の里、大日堂の近くにひとりの若者が住んでおった。名前のことはようわからん。そんだで、若者っつうことで語るけんど、聞いておくれ。

働きもんだが、若者の暮らしはかすかす。少し暮らし向きがよくなったかと思うと、父やんが死んだ。母やんが死んだ。ふたつ葬式出して、銭つかって、すってんてんになった。ひとりになって、またせっせと働いて、なんとか目先が見えたと思ったら、稲にイモチが出るわ、畑に青虫がわくわ、つうぐあいだ。

「兄いんとこは、貧乏百姓のせつなさ絵にかいたみてえだ」

「次から次へとなあ。なにひとつ悪いことするというでねえになあ」

「ふんとにおやげねえ話だわさ」

「神ほとけも、ちったあ兄いのこと気にかけてくれてもよさそうなもんだでやなあ」

人が寄って、若者の話が出るときは、いつもそんなふうであったと。

ある年の暮、ぼつぼつ炬燵(こたつ)もはずそうかという生暖かい夜。若者はうたた寝をしておったが、なんともいえねえぶきみな気配に、はっと目をさました。

見ると、いっぴきのくもが、天井から銀色の糸を光らせ、若者の顔のま近に降りていた。飛び起きた若者は、

「夜のくもは、親に似ていても殺せ」

といっていた母やんのことばを思い出して、たたっ殺そうとしたが、くもはまだ小さく、ひとり暮らしの若者は、なんだかかわいそうになって、殺すのをやめた。するとくもは、糸をはい上がってあっという間に天井に消えた。

夏になって、朝早くから小泉の日向山に入った若者は、下枝払いに精出して、でっかい束をいくつか作った。

「昼めし食ったらひと休みして、束しょいおろすべえ」

若者は手近な切り株に腰をおろした。昼めしをくい、ちょっと横になった。天気はいいし、風は気持ちがいい。若者はいいぐあいに寝込んじまった。

すると、そこへ一匹のくもが出てきて、寝ている若者の足の親ゆびに尻を押しつけて糸をまきつけると、そばの草むらん中へ消えた。消えたと思うとすぐまた出てきて、ゆびに糸をまきつける。

それをくり返しくり返しするうち、糸はぐんぐん太くなって、じきにひもほどになってな、若者の足のゆびをがんと縛りつけたと。

ちょうどその時だ。同じ日向山に入っていた村の衆がひとり、山をおりてきて、その様子を見つけたっつうわけだ。

「こりゃあおかしい。ただごとじゃあねえ」

そう叫んだ村の衆はな、若者をたたき起こすと、ふたりしてくもの糸を切ろうとした。ところがねばねばしたくもの糸は、ちょっとやそっとのことで切れるもんじゃあねえ。鎌(かま)やなたの刃、はねかえすようだ。

必死で切りはなして、くもの糸をそばのでっかいつつじの木の幹に縛りつけ、ほっとしたとたん、どうだ。そのつつじの太てえ株がぐらぐらとゆれはじめ、くもの糸に引っぱられてばりばり音を立て根こそぎ引っこ抜かれた。そして凧(たこ)みてえに宙に舞いあがると、ぐんぐん山をくだっていく。

「ひえー……」

おったまげて腰を抜かさんばかりのふたりは、気を取りなおして、宙舞って山ぁくだっていくつつじの木、夢中で追いかけた。

なんと、つつじの木は大日堂の天井のなかへすい込まれていった。

ふたりの話を聞いた村中ははちの巣突っついたようにわらわら大騒ぎになった。

「おっそろしいこんだ。大日堂の天井裏にくもの化けものいるとは……」

「なんとしても退治せにゃあ」

「そうだ、そうだ。また兄いの次にだれか狙われる」

村の男衆は、鍬(くわ)だの棍棒(こんぼう)だのそれぞれに得物持って集まったが、

「じゃあ」

と先立つ者はいない。

「ここんとこはやっぱお武家さまに先頭きってもらって」

というわけで、郡役所の侍を先頭に押し立てて大日堂につくと、こわごわ天井をはがしはじめた。

すると、いたいた。針みたいな毛をまっ黒な体にむじゃらむじゃら生やした大ぐもが、尻から銀色の糸吹き出して向かってきた。

大ぐもと村の衆とのはげしい戦いは長いこと続いたが、侍を先頭にした村の男衆あげての必死の力は、とうとう大ぐもをやっつけた。

こうして、大日堂に巣くっていた化け物の大ぐもは退治された。

その後二度と化け物が住みつかぬようにと、大日堂は天井を張らないまんまにすることになったんだと。

若者のところは、それからどういうわけかしらねえけれど、だんだん暮らし向きがよくなっていったと。嫁ももらって、子も出来て幸せになったんだと。

おしまい。

「そのまんま語れる上田の民話30
塩田平民話研究会編著」より

（民話は天井がないと結ばれていますが、
現在の大日堂は内陣のみ天井があります）